

り上げて論じている。江戸後期から近代の精神史を陽明学の観点から捉えた内容である。

以下、シンポジウムや共同研究の成果論文集等について触れたい。

河野貴美子・杜曉勤編『中日古典学ワークショップ論集—文献・文学・文化—』第一巻（汲古書院）は、早稲田大学及び北京大学で開催された中日古典学ワークショップ（中日古典学交流与融通工作坊）の成果論文集である。「日本語版序言」には、漢字漢文文化圏共通の課題として議論の場を設けることを目的として、中日古典学ワークショップを立ち上げたことが記されている。なお、既に本書の中国語版の杜・河野主編『文献・文学・文化—中日古典学交流与融通工作坊論文集』第一巻（北京大学出版社、2022年）が刊行されている。

水口幹記編『東アジア的世界分析の方法—〈術数文化〉の可能性』（文学通信）は、水口幹記編『前近代東アジアにおける〈術数文化〉』（アジア遊学、勉誠出版、2020年）の続編として位置付けられている。本書は、国際色豊かで多彩な執筆者による術数に関する論考が収められ、術数の研究の現状を理解する上で必読の書であろう。また第三部所収「天文占文献二十三種解題」は平易にまとめられており、当該分野の資料の調査・検索の階梯として有用である。

大形徹・武田時昌・平岡隆二・高井たかね編『東アジア伝統医療文化の多角的考察』（臨川書店）は、京都大学人文科学研究所共同研究班の成果論文集である。文理横断的な視点をもって東アジア伝統医療文化を構造的に把握し、理論的特質や今日の意義、可能性を探ることを目的とした内容である。日本医道や鍼灸医術の日本的な展開、朝鮮半島における医書の伝播等の多彩なテーマの論考が収められている。

王宝平・町泉寿郎編『転換期における東アジア文化交流と漢学』（二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター）は、二松学舎大学日本漢学研究センター主催のシンポジウムを基にした論文集である。本書における「転換期」とは、19世紀末～20世紀初頭を指し、漢学が洋学に地歩を譲り、洋学導入による近代化を推進した時期でもある。本書は、このような時期に東アジアにおいて漢学がどのように作用したかをテーマとする論考を収めたものである。

京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター編、矢木毅・永田知之・道坂昭廣『続・漢籍の遙かな旅路—日本への旅路』（京大人文研漢籍セミナー、研文出版）は、朝鮮半島を経由し日本に舶載された漢籍が日本において翻刻され、和刻本が朝鮮、更には中国へと環流していく事象とそれに伴う東アジアの人々の交流等について、具体的な漢籍を題材に平易に論じられている。（高田宗平）

●文 学

はじめに

学界展望（文学）は、2024年1月から2024年12月までに日本国内で公刊された著書・学術論文のうち、著書を中心に展望する。各担当者がその時代に関する専門書を抽

出して執筆し、名古屋大学中国語中国文学分野・専門の星野幸代がとりまとめを務めたが、見落としがあった場合はお許しいただきたい。研究分野の分類と担当者は、項目順に、「総記」・星野幸代、「先秦・両漢」・田村加代子（名古屋大学）、「魏・晋・南北朝」・堂蘭淑子（愛知教育大学）、「唐・宋」・佐野誠子（名古屋大学）、「元・明・清」・廣瀬玲子（専修大学）、「近現代」・星野幸代、「日本漢学」・田村加代子である。意図せずに、全て女性の布陣となった。

一、総記

前例にならない、図書分類上の「総記」の指すものに限らず、時代区分の領域横断的な著作をここで扱っている。

比護遥『近現代中国と読書の政治：読書規範の論争史』（東京大学出版会）は、「読書という行為を手掛かりに、中国の政治文化史を捉えなおすこと」と本書の目的を述べる。本書にいう「読書の政治」とは、「本来は自由であるはずの読書という営みを外部から抑圧する暴力的な権力性」を指す。すなわち読書という行為にはそれぞれの時代特有の期待と意図が交錯し、それはその時々々の条件に規定されている。いっぽうで読書は、一定のリテラシーを持つ主体が能動的に参与してはじめて成り立つ行為であると本書は指摘し、「読みたい」欲望が如何なる条件で形成されたかを検討していく。各論では1930年代から1990年代に重点をおいているが、中国の「読書」の起源を春秋戦国時代から民国期にいたるまで辿り、習近平政権下における「全民閱讀活動」および中国人エリートに古典名著の教養を求める動きも視野に入れており、インターネット時代の読書行為を考える上でも示唆に富んでいる。

山下大喜『中国近代における「国語科」の創成—胡適の思想的模索』（九州大学出版会）は、国民国家形成期に近代学校制度が導入される中で、「国語科」創成へと至る歴史的過程を追い、文学革命の旗手・胡適の「国語」教育をめぐる思索を通じて国語教育の模索を跡付けている。思想史上および文学史上の胡適の位置づけを踏まえて、教育学のフィールドから胡適を再評価する学際的研究である。

スーザン・マン著、五味知子・梁雯訳『張家の才女たち』（東方書店）は、晩清の常州のある読書人の家庭の「才女」たち三世代の生涯を、彼女たち及び周辺の男性たちの書き物に依拠しつつ小説／評伝として構成し、著者による考察をエピソードとしたものである。小説仕立てに落とし込むことによって、原資料の背景、彼女たちの感情、また母・娘・孫娘（「娘」の姪）を取り巻く女性たちの愛情・怨念・激情が、文学的応酬のさざめきと並る才気、それを押し殺された鬱屈とともに描き出されている。歴史家が文学という方法を通すことにより、清朝の女性の日常と思索、感情を浮かび上がらせた著作と言える。小浜正子氏の解説は本書が資料の行間に隠された女性の「沈黙」を生き生きと蘇らせたことを高く評価するとともに、その限界も指摘している。また小浜氏の解説により、五味氏、梁氏を中心に本書の翻訳を支えた女性研究者たちのネットワークが浮かび上がる。

周密『BLと中国—耽美をめぐる社会情勢と魅力』（ひつじ書房）は初の中国BL（ボ

ーイズラブをテーマとする文芸作品を指す。中国語では「耽美」がこれに相当する）に関する論著である。BL としては漫画が主流の日本と異なり、「耽美」の最も多い形式は古代中国を舞台にした小説である。それらの作品は異性愛主義の厳格な検閲をすりぬけて、一見無難な表現からクイアな意味を読み取りつつブロマンス（bromance）な解釈を発信する読者と、濃密な共犯関係を結ぶことによってアニメ、実写ドラマまで入り込んでいる。本書は、検閲制度と逮捕された作家たちをめぐる事情、戦略的な表現と受容、SNS 等プラットフォームと市場の現在に至るまで、「耽美」作品現象を理解するための見取り図を立体的に示している。

名著の新装版として、青木正児『中華飲酒詩選』（角川ソフィア文庫）は、1961 年筑摩書房版、筑摩叢書を経て、既に電子書籍版（平凡社東洋文庫）もある上での出版であり、一般愛読者が年月を経ても絶えないことがうかがわれる。中村喬「解説 父青木正児のことなど」が添えられている。（星野幸代）

二、先秦・漢

大塚秀高『中国古典小説史—漢初から清末にいたる小説概念の変遷』（ちくま学芸文庫）は 1987 年放送大学教育振興会より刊行された『漢文古典Ⅱ—中国小説史への視点』を新たに文庫化したものである。「小説」の始まりを『莊子』をはじめとする戦国諸子の「寓言」に求め、源泉を『春秋左氏伝』や『史記』などの史書に見られる、ときに虚構ともみなすべき「物語り」の要素に見出し、のちの唐代小説への濫觴とする。注目すべきは、莊子しかり、黄老の学を好んだ司馬遷しかり、小説の源が儒家ではなく、史官や方士、老莊にあったという指摘は、その後、中国小説が仏教、僧侶、さらには民衆の関与によってその形態を多様化させることをふまえると、必須の観点であろう。

釜谷武志『歌と語りの文学史—両漢文学考—』（研文出版）は、主に楽府と辞賦についての論考を収めている。とくに賦について、文学とは『毛詩』大序にあるごとく、その初源は心の内なる思いを「声」によって表出するものであり、それが楽曲をとまなえば「歌」となり、朗誦されれば「賦」となり、楽府のみならず辞賦もその始まりは声の文学だったことを確定したことで、賦の韻文と散文の中間的文体の根源を明らかにする。賦は美しい聴覚の文学から華麗な視覚の文学へと変容しつつも、文字の奥には声の文学の痕跡を認めるという。本書にはそれぞれの論考に至った動機が詳細に記され思索の遍歴を知ることができ興味深い。（田村加代子）

三、魏・晋・南北朝

まず長年の研究をまとめたものとして大地武雄『陶淵明新研究—自己をみつめる—』（明徳出版社）が刊行された。1974 年～2016 年に発表された論文を収め、陶淵明篇 11 篇、夏目漱石篇 7 篇、附篇 4 篇よりなる。陶淵明について著者は、多面的自己を発見し表現したところに多面的陶淵明の真実の姿があるとして、陶淵明の処世観、死生観、孤独感等について論じている。例として「陶淵明の孤独感」では、官僚生活の中で俗世間から遊離し孤立化してゆく自己を自覚し、帰田後の貧窮の中でも己の孤高な存在を固守

することで孤独を深化・信条化していったことを指摘する。さらに自己の孤独な姿を孤生松や孤影に客観化することで自我の本質的孤独性をつきつめ、それを自己の生き方として享受したことが重要であり、ここに疎外感のレベルにとどまらない、陶淵明独自の孤独感の認識があると述べる。

福井佳夫『梁の蕭兄弟一昭明太子・簡文帝・元帝』（汲古書院）は、梁武帝蕭衍の子である蕭統・蕭綱・蕭繹の三兄弟について、彼らの詩文や関係資料の日本語訳を多数示しながらその人柄、事跡、文学について記した評伝である。昭明太子蕭統については、好文の太子であった魏の曹丕に自身も周囲も比擬していたこと、『文選』の採録基準に関わるとされてきた序中の「沈思」「翰藻」は、曹丕を称揚した卞蘭「賛述太子賦」の「沈思泉涌、華藻雲浮」を意識して使われたと考えられることを、蕭統自身や劉孝綽ら周辺の人々の著作における卞蘭賦への言及などを根拠に論じている。簡文帝蕭綱については、幼少期には父から魏の曹植に擬えられ、太子に立てられた後は自らを曹丕に比擬して文壇指導者たらしめたこと、蕭綱の詩文の特質は無生物が情感を有するがごとく「息づく叙景」にあるが、それは雍州刺史時代の北魏軍との戦争体験によってみがかれたものであろうことを、辺塞詩と艶詩の相関関係にもふれながら論じる。また元帝蕭繹については、隻眼となったことに対する強い劣等感が、初期には学問や著述に励んで高名を得ようという上昇意欲となっていたが、母阮修容の死をきっかけとしてバランスがくずれ、侯景の乱によっていっきに悪いほうにふりきれたと考えられることを述べる。

『〈中国の詩学〉を超えて 川合康三先生喜寿記念論集』（研文出版）は、川合康三『中国の詩学』（研文出版、2022年）に示された詩学上の普遍的諸問題にこたえるべく編まれた論文集であり、論文17篇と川合氏の著作目録・簡譜を取める。このうち魏晋南北朝文学に関わるのは3篇。成田健太郎「作者の自覚から筆勢の自覚へ」は、『中国の詩学』で示された「作者・話者・読者」の問題を踏まえ、『詩経』から中唐までの一人称が登場する作品を主に取り上げながら、作者と話者の一致・不一致がどのように表れているかを論じる。作者と話者の区別がよく問題となる詩や楽府のみならず、散文も分析対象としているところに特徴があり、文では作者とは別に「筆勢」という観点が自覚されはじめることを指摘する。宋吟「建安詩における自然描写の変容と作者の個—王粲・劉楨を中心に—」は、川合「うたげのうた」論を踏まえてまず曹植「公讌詩」と王粲の失題詩を取り上げ、描かれる地点も行事（車遊びと狩猟）も異なるにもかかわらず、楽しさを喚起する自然物の種類には大きな差異は認められないことを確認する。そのうえで王粲「雜詩」が、王粲の憂悶を核とした複層的で個別的な文脈を持ち、实景に溶融した寓意を描いていること、劉楨「徐幹に送る」詩は、軟禁生活という極めて特殊な境遇とその創作態度が、「細柳」や「方塘」等それまで描くに足る価値を持たなかった景観に新たな意味を付与したことを指摘し、両作品は景観と抒情に関する既存の定式から抜け出していると述べる。池田恭哉「顔之推と典故—「観我生賦」を中心に—」は、顔之推「観我生賦」における典故の使い方を詳細に分析したものである。顔氏家学の反映、および『顔氏家訓』に展開される文学観との関係などを論じ、家学の『左伝』は杜預注を基本とすること、典故運用では地理に細かく配慮していたことを指摘する。また典故の

来源となった先行の賦や詩文には『文選』所収のものが多くことから、詞華集が陸續と編纂される中で、評価される作品がある程度固定化を見たであろう可能性を指摘するなど、当時の知識受容の様相にも論が及んでいる。

訳注書では、小川恒男『六朝楽府訳注（一）』（白帝社）が刊行された。本書は小尾郊一・岡村貞雄訳注『古楽府』（東海大学出版会、1980年）の後を受け継ぐもので、『楽府詩集』（中華書局、1979年）を底本とし、「鼓吹曲辞」の内の「漢铙歌」と、「横吹曲辞」の「漢横吹曲」中の六朝作品を対象とする。多くが齊梁期以降の作品であり、謝朓を中心とする集団、梁簡文帝を中心とする集団、陳後主を中心とする集団の中で競作された可能性の高い作品を含む。体例は「本文及び書き下し」「日本語訳」「校勘」「押韻」「語釈」よりなり、語句索引を附す。「語釈」の用例には本文と書き下しが附され、『文選』『玉台新詠』に見える場合はその旨の記載がある。「あとがき」によると、以前雑誌に掲載した部分についても今回すべて稿を改め、第二巻では「相和歌辞」を取り上げる予定という。

また雑誌では、小南一郎先生傘寿記念論集『桃の会論集』9集が刊行された。収録論8篇のうち魏晋南北朝文学に関わるものは、猿渡留理「曹植四言詩考（下）—文帝曹丕に献じた「応詔詩」の特徴」、堂蘭淑子「廬山慧遠集団と謝靈運の山水詠における「感応」表現」、劉苑如「酒、漉之贈：以宋魏征戰的犒勞書写為中心」、小南一郎「『金藏論』と縁起文芸の形成」の4篇である。

最後に復刊では、吉川忠夫『竹林の七賢』、興膳宏『陶淵明』（ともに講談社学術文庫）がある。いずれも原本は世界思想社の「風呂で読む」シリーズの一冊で、『竹林の七賢』については一部手直しが入っている旨「あとがき」に記載がある。（堂蘭淑子）

四、唐・宋

高橋文治『歴史と文学のはざまで一唐代伝奇の実像を求めて』（東方書店）は、2023年11月の刊行であるが、昨年の学界展望でこぼれ落ちていたためここで取り上げる。同書は、一般には、六朝志怪の記録性にくらべて、創作の色合いが濃い唐代伝奇を「事実の記録」として読み直したものであり、その読み解きからは、伝奇の背後にみられる士大夫の感情史めいたものを感じた。筆者がすでに『WEB 東方』（2024年3月15日）で書評を発表しているので、そちらも参照されたい。

紺野達也『王維『輞川集』の研究—詩歌・園林・絵画の融合—』（研文出版）は、王維の『輞川集』を軸に詩歌と園林の関係を考察し、さらに後世の文人がそこに絵画を加えた関係を如何に見ていたかについて検討を加えている。王維の『輞川集』の世界とは、『文選』を主とする古典に表現された長江流域以南の世界を再現したものであったことを論証し、蘇軾らの詩画一致への興味から、「輞川図」と対をなす『輞川集』が王維の別集として「代表作」となったとする。

赤井益久『中唐詩論集—研究・講演・書評』（研文出版）は、著者のこれまでの論文（書き下ろしを含む）・講演録・書評をまとめた書。元稹から出発し、同世代の皎然、張籍、李紳の詩論・史観についての論考が続く。そのあとには、「『晚唐』考—その定義と

「中唐」との差異」として、晩唐のあとに概念が規定された中唐の語への考察に向かう。これらの論考に通底するのは、古典世界における文学史観がいかにあったか、それをどのように活かして現在詩を読んでいくかということであろう。

赤井氏は、『NHK カルチャーラジオ 漢詩を読む』（2024 年 4 月～2025 年 3 月）のテキストとして『NHK カルチャーラジオ 漢詩をよむ 漢詩の歳時記春夏編』、『NHK カルチャーラジオ 漢詩をよむ 漢詩の歳時記秋冬編』（NHK 出版）も刊行している。2015 年度にも同講座にて「中国の四季のうた」と題しての講義を行っているが、そちらとは重複のない内容である。かなりマイナーな詩までとりあげており、通り一遍の歳時記とはなっていない。

前川幸雄『元白唱和詩研究続編—白氏長慶集』（朋友書店）は、副題に白氏長慶集とあるように、白居易・元稹の唱和詩についてではなく、白居易を論じた著者の論考をまとめたものである。白居易の神仙観にはじまり、陶淵明受容の話題に広がる。

この他、論文集として、『〈中国の詩学〉を超えて 川合康三先生喜寿記念論集』（研文出版）が出版されている。全 17 篇の論文のうち、唐代文学に関する論文は、以下の 9 篇である。乾源俊「道の探求—李白「素畜道義」考」、和田英信「李白テキストの揺らぎ」、川合康三「杜甫、詩を語る」、鈴木達明「韓愈「送孟東野序」の「鳴」と受動の文学論」、好川聡「韓愈詩における他者の戯画化」、遠藤星希「李賀と植物の比喩」、二宮美那子「女性詩人はいかなる詩を詠むのか—『瑤池新詠集』と魚玄機の詩作から」、伊崎孝幸「歴史事実と詠史詩—李商隱の詠史詩における虚構をめぐる」、陸穎瑤「王昭君の変貌—唐詩と平安朝漢詩のあいだ」。このように、記念されるべき立場である川合氏本人も寄稿している。川合氏はさらに『偏愛的漢詩雑記帖』（大修館書店）を出版しており、こちらは肩肘張らない唐詩を中心とした、漢詩にまつわるエッセイ集である。川合氏の旺盛な執筆意欲を伺うことができる。論文集の方に戻れば、収録される論文の多くが、川合氏の論考を踏まえて論を展開している。これは、副題の「中国の詩学」が川合氏の著書名（研文出版、2022 年）にちなんでおり、まさに、川合氏の研究を超えてさらに中国古典詩を中心とした研究を深めていこうという門下生の決意のあらわれであろう。

同じく、魏晋南北朝でもとりあげられている『桃の会論集』9 集には、佐野誠子「『法苑珠林』感応縁における出処不掲載記事—書く僧侶としての道世の検討—」が掲載されている。

訳注では、赤井益久・岡田充博・澤崎久和『唐代小説集『河東記』詳注』（上・下、汲古書院）が刊行された。同書は、『太平広記』に佚文のみが残る唐代の小説集全 34 篇を三人の著者がそれぞれ分担して訳注原稿を作成している。語注に大きな特徴があり、『河東記』の他の条および、『太平広記』内の用例を丹念に拾い、語義を確定させている。

また、吉川幸次郎・興膳宏『杜甫詩注』の刊行が第Ⅱ期として再開された。『杜甫詩注』（第 11 冊、東川の歌（上）、岩波書店）は、2023 年亡くなられた興膳氏が、再校まで行っていた原稿をもとに氏の一周忌に刊行された。広徳二年（764）から成都に戻るまでの正味 1 年 8 ヶ月の間の東川時代の今体詩の訳注を収める（古体詩は第 12 冊との

こと)。なお、第Ⅱ期の刊行が第13冊までに止まったのは、興膳氏が入稿済みの原稿が13冊分までだったからだそうで、興膳氏愛用のパソコンには、第19冊の途中までの草稿が残されていたという（木津祐子・二宮美那子・池田恭哉「付記」による）。関係者の尽力による、第Ⅲ期以降の刊行も期待したい。

2024年は宋代文学に関する単著は刊行されなかったようである。

唐代で取り上げた『〈中国の詩学〉を超えて 川合康三先生喜寿記念論集』の宋代文学関連の論文は以下の4篇である。宇佐美文理「蘇東坡詩における風景表現の問題」、緑川英樹「葉県時代の黄庭堅」、浅見洋二「『有力』と『無意』—中国詩学における風と水のイメージをめぐる」、永田知之「『国風』民間起源説の波紋—南宋末期から清代中期までの文学論を材料として」。

訳注は、齋藤茂他『『夷堅志』訳注 丁志上』（汲古書院）が刊行された。（佐野誠子）

五、元・明・清

『明清文学論集』編集委員会編『明清文学論集 その楽しさ その広がり』（東方書店）は、2024年3月をもって東京大学東洋文化研究所を定年退職された大木康氏とその受業生22名の計23名による論文集である。「明清文学の奥深さ—四大奇書の探求」「明清文学の幅広さ—短篇小説集と清代小説」「明清文学の背景—出版と社会」「明清文学の伝播—朝鮮、日本」の四部で構成され、出版文化など文学の社会的背景や、朝鮮半島と日本への影響をテーマとする論考もある。紙幅の関係で個々の論考を紹介することはできないが、本書のように、対象が明清という幅広い時代にわたり、その内容にも「広がり」のある書物は、読者の視野を広げ、新たな発想の源となるであろう。

大塚秀高『中国古典小説史』（ちくま学芸文庫）は、1987年に放送大学教材『漢文古典Ⅱ—中国小説史への視点』（放送大学教育振興会）として刊行された著作の文庫化である。タイトルを変更し、サブタイトルを「漢初から清末にいたる小説概念の変遷」とすることにより、各時代の作品を紹介しつつ、近代小説とは異なる小説概念の歴史をたどるという内容が明確に示された。全15章のうち、第6章「類書から通俗類書へ」以下が元・明・清に該当する。この時期の小説は著者の専門分野でもあり、文言小説を収録した明代の通俗類書、公案小説や才子佳人小説（特に、佳人が男装する作品）など、教科書では取りあげることの少ない作品についても、独自の知見に基づき詳しく解説している。「あとがき」（原著の「まえがき」を再録した箇所）に述べられているとおり、本書の特徴は、「小説とこれをはぐみ続けた講唱文芸の関係」に光をあて、とかく別々に論じられがちな文言小説と白話小説を、相互に影響を及ぼしあったものとしてとらえる視点である。両者の関係は複雑であるが、本文の論述に合わせて示される年が、大いに読者の理解を助け、啓発を与えてくれるだろう。原著の刊行から40年近くを経たことから、参考文献は、この間の単行書と翻訳書を加えて改訂されている。

岡晴夫『中国古典戯曲演劇論』（勉誠社）は、2022年に他界した著者の主要業績を受業生から成る刊行委員会が編集した論集である。「元曲」「明末清初の戯作者・李漁」「京劇—演劇世界における京劇」の三部から構成され、巻末に「略年譜・著作目録」と

刊行委員の一人である金文京氏による「解説」がある。著者の関心の中心はつねに、劇が上演されたときのおもしろさを探究することであり、戯曲テキストの精緻な読解と分析によって、当時の観客を楽しませたであろう演劇的效果が明快に論じられている。ときにはシェイクスピアや歌舞伎、狂言などとの比較もまじえつつ、説得力のある議論が繰りひろげられる。近年、論文は機関リポジトリなどでダウンロードできるものも多いが、やはり一冊の書物にまとめられてこそ、著者の研究の独創性や一貫性は際立つといえよう。

ここからは、近年、次々と力作を公刊されている小松謙氏による訳注と著書2冊について述べる。小松謙訳『詳注全訳水滸伝』第5巻（汲古書院）は、全13巻を予定して、2021年から着実に進められている画期的な訳業の5冊目（第27回から第33回）である。容与堂本（中国国家図書館蔵）を底本とし、この本と金聖歎本の文中の評をすべて訳出し、他の版本の異同についても注釈で言及する。訳文を上段、注を下段に配した読みやすいレイアウトや、『三才図会』による当時の生活道具や武器の図示など、読者の深い理解を促すように周到にデザインされており、高度な専門性とわかりやすさを兼ねそなえた書物となっている。同じく小松氏による『中国文学の歴史 元明清の白話文学』（東方書店）は、元・明・清を、印刷術による書籍の大量複製が可能となり、エリート以外の人々が理解できる書き言葉（＝白話）が本格的に出現したことにより、「楽しみのための読書」が成立した時代としてとらえ、白話文学を通観する。散曲・戯曲・小説のうち主要な作品を、引用（曲文については原文と訳文、小説は訳文のみ）を交えながら解説している。さらに『熱狂する明代 中国「四大奇書」の誕生』（KADOKAWA）で小松氏は、「明代が中国文学に全く新しい局面を切り開いた時代」（「はじめに一明という時代」）であったことを、『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』『西遊記』（いわゆる「四大奇書」）を生み出した歴史的・思想的背景を探ることで明らかにする。政治や経済の動きと出版文化の拡大・洗練、陽明学のもたらした「情」の重視や「真」の追求などが、縦横に関連づけて論じられている。

山本英史『清代知識人が語る官僚人生』（東方書店）は、実在した人物であり清初に知県をつとめた黄六鴻が「私は」と一人称で語る形式で書かれている。黄六鴻には、地方官の心得を記した著作、『福惠全書』全32巻がある。山本氏は、歴史学の研究資料として長年にわたり活用してきた『福惠全書』に基づいて、清代の知県の日々の営み、すなわち着任から、その後の日常業務、人間関係、裁判の事例、そして離任にいたるまでを、実に具体的に説き明かしてゆく。一般向けの読みやすい書物であるが、前近代の中国で詩文を残した知識人の多くが役人でもあったことを思えば、文学研究者にとっても学ぶところが大きいであろう。

陳平原著、林祁・大梧美代子訳『中国現代小説の起点 清末民初小説研究』（東方書店）は、1989年に『二十世紀中国小説史』第1巻（北京大学出版社）として刊行され、2005年に『中国現代小説の起点』（北京大学出版社）として新版が出た著作の2010年2版の日本語訳である。原文は、『陳平原小説史論集』（河北人民出版社、1997年）中巻、『陳平原文集』（商務印書館、2024年）第3巻にも収められている。陳平原氏は1980年

代以降、中国の小説史について多くの論著を発表しているが、著書の日本語訳はこれが初めてである。対象とする時代は、1897年から1916年、すなわち五・四運動よりも前の時代である。陳平原氏の「日本語版序」によれば、「小説史とは、小説の形式の進化と発展の経緯に論述の重点を置くべき」であり、本書が目指すのは「小説に対する論述の寄せ集め」ではない。そこで、本書の前半では、外国の小説から受けた啓発、小説の商品化、雅俗の問題など小説の文化的背景について述べ、後半はもっぱら小説の形式を、構成・文体・叙述・テーマなどの観点から論じている。雑誌・新聞等に発表された清末民初の膨大な数の小説論が参照され、特に、雅俗の問題を論じる第4章、文言と白話の共存について論じる第6章では、明・清（清末以前）の小説にも論及しつつ、前近代から近代への小説や小説論の推移を考察している。（廣瀬玲子）

六、近現代

佐藤普美子『美感と倫理—中国新詩研究』（汲古書店）にいう「美感」とは「美しいと感じること」、「美に対する感覚」であり、「倫理」とは「人と人との間のあるべき関係」の中で「よく生きる」ためのあり方とされる。本書の第一部・第二部は馮至と卞之琳の詩と散文を対象に、彼らの社会、時間に対する洞察・観照と、「美感」と「倫理」がいかに結びつき、表現されているかを探る。第三部は、外国文学や西洋詩学の影響を受けた宗白華、周作人、朱光潜の美感と人格修養をめぐる詩論を検討し、新詩の形式と鑑賞に果たした役割を明らかにしている。第三部第二章では、香港の梁秉鈞と台湾の陳育虹の作品を対象に、新詩における古典テキストの交錯を考察し、後者については女性詩人たちの時空を超えた連帯の響きをも浮かび上がらせている。

孫安石・柳澤和也編著『内山完造研究の新展開』（東方書店）は、神奈川大学共同研究奨励助成金「内山完造と日中関係史の研究」（代表：孫安石）の成果に基づいている。内山完造の文章、交友、内山と日中文化・文学・政治的出来事等を対象とした8本の論考、研究者と遺族によるコラムを収録し、「資料篇」には講演の文字起こしと遺族提供のアルバム等、貴重な新資料を取めている。「序にかえて」によれば、孫安石氏および共同研究チームは、内山完造が中国人や中国社会観察を綴った54冊もの未公開「日記」を入手し、整理と翻刻を進めており、膨大な作業ではあるが、将来的には公開される見込みとのことである。

魯迅・周作人をめぐる学術論文集『周氏兄弟研究』第2号は国際シンポジウムに基づく「周氏兄弟研究青年論壇」特集であり、論文と研究ノート計8本を収録する。中国文芸研究会は『野草』第112号、113号を刊行、後者は岡田英樹氏追悼号であり、「「明日へ橋を架ける」—岡田英樹先生「満洲文学」研究シンポジウム記録」が設けられた。

藤井省三『21世紀の中国映画』（東方書店）は、約四半世紀にわたる賈樟柯、張芸謀らの中国映画およびシンガポール映画、ドラマなど映像作品25本を取り上げ、周辺の文学・文化現象や背景となる事件・社会事情を通して読み解く。幾人かの主人公を貫くキーワードは「阿Q」であり、底層の人々が最底層の人々を虐げる根深い構造が示唆されている。最底層で生きる農民のささやかで儚い幸せを描く映画「小さき麦の花」

(2022) が若手監督に撮られ、若者に支持され、打ち切りに遭った現象は興味深い。「賈樟柯インタビュー」は賈自身による「罪の手ざわり」(中国では上映不可)解説として、また「追悼山口淑子」は晩年の「李香蘭」のエピソードとしても貴重である。

徐園『20世紀前半における中日連載漫画の比較研究』(日本僑報社)は、第一部で民国期における日中の漫画史を概観した上で、第二部は「ノンキナトウサン」と「王先生」、「翼賛一家」と「牛鼻子」、「のらくろ」と「三毛」を比較し、それぞれアメリカン・コミックスの影響、戦時下のメディアミックスの影響、漫画のプロパガンダ性に着目して論じている。第三部は、日本占領下の雑誌『北京漫画』に掲載された日本人漫画家の作品を発掘し、日本占領期の華北における日本人漫画家の活動と漫画をめぐる日中文化交流という、これまで焦点の当たらなかった分野を開拓している。

鄭秋迪『吉本ばななの文学と中国『キッチン』を中心に』(論創社)は、改革開放後における日本文学の翻訳ブーム、それに続く村上春樹熱など継続的な青春小説人気を踏まえて、読者のwebコミュニティやアンケートに基づく読者論、中国人研究者の吉本ばなな論の分析と整理、中国人作家・映画監督への影響を論じる各論等で構成されている。今後、吉本ばななをめぐる日中文学現象を対象とする研究者に資する書籍であるといえるだろう。

川瀬健一編著『台湾で上映された映画の研究 1952(民国41)年～1953(民国42)年』(東洋思想研究所)は既刊『台湾で上映された映画の研究 1945年～1949年』(2023年)、『台湾で上映された映画の研究 1950年～1951年』(2019年)に続き、貴重な資料と目録、解説を全928頁に収録しており、資料的意義が非常に高い。

栗山千香子・上原かおり編『中国語現代文学案内 中国、台湾、香港ほか』は30名余の研究者による研究の手引であり、100名近い作家の基本情報、邦訳作品一覧を網羅しており、初学者から研究者までの参考となる。

台湾日本語文学の再録として、呉濁流、楊逵らの名作を収める山口守編『バパイヤのある街 台湾日本語文学アンソロジー』(皓星社)が出ている。

SF短編集『台湾文学コレクション1 近未来短編集』(三須祐介訳、早川書房)は、初邦訳の作家6名を含む8名の台湾作家の作品集である。物語の主人公は仕事や介護の疲労、家族や恋人との人間関係などに悩むリアリティを持ちつつ、アンドロイド、人工知能型OSが組み込まれた日常に生きており、バーチャル世界の人格がジェンダー役割や人間中心主義を攪乱するところに、台湾小説の特徴がうかがわれる。施叔青『台湾文学コレクション2 風の前の塵』(池上貞子訳、同前)は「湾生」二世のヒロインが台湾の花蓮でルーツを辿る物語を軸とし、戦争の記憶を背景に、時空を超えて台湾の原住民、日本人、朝鮮／韓国人、英国人等の愛憎が交錯する。陳思宏『台湾文学コレクション3 二階のいい人』(白水紀子訳、同前)は、美容師の母と子どもたちという家族設定と時代はユートピア的な台湾映画『本日公休』(傅天余監督、2024年日本公開)と重なるが、貧困を生き延びた母子の闇と、人間性が描かれる。郭強生『ピアノを尋ねて』(倉本知明訳、新潮社)は仏訳が刊行され、10か国以上の出版社が版權を獲得済みという。本作品には、西洋古典音楽が台湾に根付いた日本統治期を想起させる要素はほぼな

い。訳者の意図は、そうした台湾固有の歴史的背景を差し引いてなお豊饒な台湾文学のテーマを伝えることにある。ピアノ調律師と顧客の静謐な対話は、フジコ・ヘミング、グレン・グールドらにまつわる言説と絡み合い、破壊されたピアノの残像を背景に、各国・地域の読者に響くだろう。

瀋陽出身の作家・鄭執はweb小説でデビューした新世代であり、初の邦訳となる『ハリネズミ・モンテカルロ食人記・森の中の林』（関根謙訳、アストラハウス）は、魔術的リアリズム風の語りで寓話と現実を縦横に往来する。寧夏回族自治区出身の作家張学東『ヤージュンと犬の物語』（関口美幸・倉持リツコ訳、教育評論社）も単著としては初の邦訳。『中国現代文学』（中国現代文学翻訳会編）は第25号が発行され、ベテランの徐則臣、蔣韻から、若手の鄭小驢、陳春成の4篇を収める（大久保洋子、上原かおり、栗山千香子、鷺巣益美訳）。

中国民国期の作品としては、新訳の老舍『私のこの生涯 老舍中短編小説集』（関根謙、杉野元子、松倉梨恵訳、平凡社）、また初訳を含む32篇を収める葉聖陶『かかし／現代中国文学・少年少女編』（福井ゆり子訳、尚斯国際出版社）が刊行された。

（星野幸代）

七、日本漢文・その他

湯沢質幸『日本人は漢文をどう読んだか 直読から訓読へ』（勉誠出版）は、日本における中国語文献の複雑に交錯する読み方の様相を解きほぐしていく。漢語という外国語をいかに読むのか、漢語語彙を取り込みつつ漢語と対峙するやまとのことばとどのように折り合いをつけるのか、そのせめぎ合いから生まれた読み方はあまりにも多様である。著者は漢語詩文の読み方を模式化する。中国語文を字音により声読する直読と、日本語による翻訳文（直訳文）を日本語音で声読する訓読という大区分を示したのち、直読を縦軸に、訓読を横軸に、その座標軸上に平安時代の『宇津保物語』や『白氏文集』などを位置づけていく。話を単純化すれば、もとはいずれの読み方も音読が前提であり、中国語音で読むか日本語音で読むかの違いに帰着するはずであるが、直読の時代から直読訓読併存の時代へ、そして変化は決してリニアではないものの、総じて直読優位、訓読優位、直読の消滅（江戸時代の直読は別途論及されている）、そして日本語音による訓読がもっぱら解義のためのものへと変容していった文化的背景を丹念に示している。

堀川貴司『五山文学探究—資料と論考』（文学通信）は、『五山文学研究 資料と論考』正・続（風間書院、2011年、2015年）の後を承けたものである。漢籍が日本に及ぼした影響の大きさは贅言を待たないが、その中でも室町期に五山の学問が公家に浸透していくさまのみならず、五山以前から博士家において研究され広まっていた公家由来の学問を五山がどのように取り込んだか、という双方向の視点を設定している。壬生雅久の事例をとおして、ひとりの公家が漢詩の師匠である五山の僧侶、横川景三より受けた添削の資料や、万里集九、月舟寿桂にあてた書簡からうかがい知ることのできる交流への希求が、また、五山僧側も文事を通じた交流への意欲があったことを、壬生家に伝存した資料を用いて示した。このような考証によって一方向的な典故の利用や受容論の

議論に偏りがちなこの時期の日本漢詩文の諸相をめぐって、公家、武家、五山三者の総体的な交流の解明を進めることが可能となるであろう。また、第三部には一休宗純に関わる資料『自戒集』伝本の一部の翻刻、伝一休作仮名法話『一休和尚不審物』の翻刻を載せ、近世の一休像の形成につながっていく可能性を推測する資料として位置づけられている。ほか五山の翻刻四本を載せる。

宮本陽佳『近世における唐話学の展開』（汲古書院）は、徂徠学との関わりを底辺にすえつつ、澤田一齋への学問の継承を射程に入れ、岡白駒の白話研究の様相と言語観を明らかにした。白駒の『水滸伝』講義で使用された版本の研究から着手し、白駒の『水滸伝』講義録の成立、講義録の分岐、各講義録の継承関係について、そして澤田一齋の『水滸伝』講義へと引き継がれた解釈と変化した解釈の要因について綿密な考察を加えている。白駒と一齋とを軸として、和刻本『忠義水滸伝』二集の施訓、訳解の問題、「和刻三言」については白駒による施訓の『小説精言』と『小説奇言』、一齋による施訓の『小説粹言』のうち版本の詳細な調査のない『精言』と『奇言』について、版本の異同を示した詳細な「異同表」が附せられ、『精言』と『奇言』が依拠した版本を推定するとともに、白駒は講義に際して異本を対校していたこと、白駒による本文の改変がなされていたことも指摘している。同時に、『忠義水滸伝』初集には見られず、『精言』に認められる対校の仕方は、白話小説が唐話学習の教材から読み物として扱われるようになった過程をも示しているとする。岡白駒の白話小説研究が徂徠学の影響下にあり、白話文献の読解においては字義を主とし、一字をも忽せにしない訓訳を旨としたことと軌を一にして、『論語徴批』においては『論語徴』の字義の取り方についての批判が見られ、『助辞訳通』においては助字の一字一字の持つ意味を見出そうとし、白話、文言を問わず通底する態度が字義を重んじるという点にあったことを明らかにしている。

川合康三〔ほか〕編『中国／日本〈漢〉文化大事典』（明治書院）は、従来、中国思想哲学、語学、文学、日本思想、漢文学などと区分されてきた項目を一書に収め総覧できるように編集したものである。学問領域の分断化を突破しようという試みである。目次は二本立てになっており、ひとつは中国編と日本編に分かれ五十音順になっている。人名、書名などの固有名詞に加え、キーワードも横並びになっているため、人と書と事項を一覧することができる。もう一方は、中国編は時代ごとの「文学・思想」を通覧できる配列になっているが、中国編でははじめに漢字、音韻学、暦、経書・経学、楽、目錄学、叢書、総集、類書、科学、出版文化、神仙、隠逸、三教一致、女性詩人、文学批評、文言小説、書、絵画、庭園、茶を別項として立てている。ここには「中国〈漢〉文化」と呼びうるものは何か、という問いにたいするひとつの答えがあると同時に文化の総体を把握できる工夫がある。日本編でははじめに漢文学の受容と変容、中国観の変遷、漢文訓読・訓点、字書、類書、和歌と漢詩、歌学と詩論、書、唐絵、庭園、漢籍の出版を別項として立てている。ここには「日本〈漢〉文化」の範疇と、中国〈漢〉文化との交点が那边にあるかを一覧することができる。日本編は時代ごとに「漢学・漢文学」を通覧できる配列になっている。「中国／日本〈漢〉文化」を一望にすることで、それぞれの交点と交点を結び、一方の文化にとどまらず、双方の文化のさまざまな様相を読

み手が紡ぎ出すことを可能にした。本書は「引く」事典であることは言を俟たないが、「読む」事典としての楽しみも有している。読む書として、工具書として必携の書である。
(田村加代子)

●語 学

はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・下地早智子）が担当する。原則として2024年1月から12月までに日本国内で公刊された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公刊された成果にも言及する。

研究分野の分類および執筆者は以下の通りである。

音韻：	更科慎一（山口大学）
文字・訓詁：	宮島和也（成蹊大学）
文法・語彙（上中古）：	楊安娜（北海学園大学）
文法・語彙（近代）：	永井崇弘（福井大学）
文法・語彙（現代）：	前田真砂美（奈良女子大学）
方言：	鈴木史己（南山大学）
教育：	小川典子（愛知大学）

「はじめに」及び全体の調整は下地早智子（神戸市外国語大学）が担当した。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも2024年に出版されたものである。

『中』	『中国語学』271号（日本中国語学会）
『中教』	『中国語教育』第22号（中国語教育学会）
『中研』	『中国語研究』第66号（白帝社）
『現代』	『現代中国語研究』第26期（朝日出版社）
『漢教』	『漢語与漢語教学研究』第15号（桜美林大学孔子学院）
『音』	『音声研究』第28巻（日本音声学会）
『シ』	『シナ＝チベット系諸言語の文法現象6：類型論と史的变化』（野原将揮・池田巧編、京都大学文学部文科学研究所）
『雲』	『雲漢』第2号（京大中国語学研究会）

一、音韻

単行本では、鈴木博之・遠藤光暁編『中国語言歴史地理研究』第一集（日本地理言語学会）を挙げる。本書は漢語音韻の分野に限定されたものではないが、遠藤氏を代表者とする科研費プロジェクトの一環として開催されたシンポジウムの成果をまとめたものである。本書では漢語の数詞「一」から「十」までの語形を取り上げ、それぞれの言語地図（稿）と、上古音・中古音・近代音にわたる語形の変遷に関する論考を収めている。